女教師彩花二十四歳

第五巻

運動会でコスプレする女性教師

―前篇―

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　運動会は波乱の幕開け
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説
※海老沢薫ＢＬＯＧ
・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■著作権について

「**女教師　彩花二十四歳　第五巻　運動会でコスプレする女性教師―前篇―**」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

家庭訪問した生徒の家で教師としてあるまじき醜態を晒してしまった彩花は、陰鬱な学校生活を過ごしていた。

そうして一学期も終わりに近づく頃、彩花の勤める中学校では年に一度の運動会が行われる時期になっていた。

全校生徒が一堂に会し、大勢の保護者が詰めかける運動会において、再び智子達から驚愕の命令を与えられる事を恐れていた彩花であったが、幸い何事もなく運動会当日を迎えることになる。

担任するクラスの生徒達と一緒に応援席に座り、ホッとした様子でグラウンドを見つめる彩花。そんな美人女性教師の落ち着いたひときは第一種目の教師対抗コスプレ競走ですぐに打ち破られるのだった。

競技に参加した他の教師達が滑稽なコスチュームに身を包み、大爆笑する生徒達の前を駆け抜けてゴールする中、最後の組でスター

トした彩花の前に残されていたコスチューム
はあまりに想定外のものだったのだ。
大勢のギャラリーが好奇と軽蔑の眼差しで
見つめる中、過激な衣装を身に纏い、羞恥に
顔を真っ赤に染めながらグラウンドを疾走す
る美人女性教師。中学校の運動会はまさに波
乱の幕開けとなるのであった。

■第一章　運動会は波乱の幕開け

彩花が中学三年生の担任になって早二ヶ月余りが過ぎ、一学期も後半を迎えようとしていた。先日、クラス委員の智子達と一緒に、不登校の麻理絵の家を家庭訪問した彩花は、そこでまた智子達の企みにより、教師としてのプライドを打ち砕かれ、相変わらず教師として、また一人の大人の女性として葛藤する日々を送っていた。ただ、幸いにも麻理絵は再び登校するようになり、それだけが彩花の唯一の救いとなっていた。

そして、中学校では一大イベントの一つである運動会が近づいていたのだった。毎年、クラス対抗戦の様相を呈する運動会は、クラス全体に一体感が生まれる良い機会となり、今年も運動会の日が迫るにつれて、彩花のクラスの生徒達も、クラス委員の智子を中心に盛り上がり始めていた。

彩花にとっては初めてクラス担任として望む運動会で、本来であれば去年以上に気持ちが高揚するはずだったが、生徒達とは対照的にその顔はどこか浮かない憂鬱な表情を示していた。それは、こないだの身体測定の時の生徒達が集う学校行事の衆人監視下の中で、自分の弱みを握る智子達が、大勢のまた自分を貶めてくる恐れを感じていたからだった。

そして運動会前日の夜、彩花は部屋の中で一人怯えていた。もしかしたら身体測定の時のように前日に智子から何か命令が送られてくるかも知れない、そう思うととても落ち着かなかった。幸い、今日に至るまでの間に智子達から彩花の元に運動会での羞恥の命令は全く届いていなかった。もう、大勢の生徒達の前で恥を晒すのは絶対にイヤ、どうか、このまま何もなければいいのに・・・。彩花は心の中でそう強く願っていた。

運動会当日を迎えた朝、彩花は校内の教員用の試着室で体操着のTシャツとトレパンに着替えていた。彩花の願いが通じたのか、結局智子達から運動会における羞恥の命令は何も送られてきてはいなかった。全校生徒やその保護者達、教職員のほとんどが揃う運動会という大舞台で、智子達がなにも命令を課してこない事は不気味ではあったが、彩花は素直にホッとしていた。そして、着替え終わるとすぐに大勢のギャラリーで埋め尽くされた運動場に向かい、意気揚々と盛り上がる自分のクラスの生徒達と一緒に、グラウンドの一角に用意されたクラスの応援席に座ったのだった。

やがて、グラウンドでは生徒達の入場行進が行われ、学園長やPTA会長の智子の母、みどりの挨拶などの開会式が無事に終わると、運動会は毎年恒例となった教師達によるコスプレ競走から始まることになった。その競技は、全学年全クラスの担任教師十二人が出場

し、各学年の担任教師四人が一組となって一斉にスタートすると、まずコース上に置かれた段ボール箱の中に入った様々なコスプレから好きなコスチュームを選び、グラウンド上に設置された簡易式の試着室の中で着替えてから、ゴールに向かって走るという内容だった。

各クラスの担任の教師達は、運動会が終わるまでの間ずっとそのコスプレ姿で過ごさなければならず、毎年運動会を最初に一気に盛り上げる目玉種目になっていた。

彩花は、去年は担任をしていなかったので、グラウンドを駆けるチャイナドレス姿の中年の男性教師や、婦人警官に扮した先輩の女性教師の姿などを見て、応援席で生徒達と一緒に大笑いをしているだけだった。それが今年は、三年生のクラスの担任として、今まさに第一種目の教師対抗コスプレ競走のスタート地点に並んでいたのだ。

「彩花ちゃ～ん、頑張って！」

「婦人警官かナースのコスプレ期待してるよ～」

彩花のクラスの男子生徒達が送る大きな声援が彩花の耳にしっかり届いていた。

「先生、男子生徒達からかなり期待されてますねぇ」

隣に並ぶ彩花と同じ三年生の担任をしている四十代の男性教師が、厭らしい笑みを浮かべながら声を掛けてきた。三年生の担任をしている彩花は、この競技で一番最後の組で走ることになっていたので、最後まで残っている。

コスチュームの中から選ぶほかなく、どんなコスプレがあるのか分からず、ドキドキしていた。

「私、今年は女医がいいなぁ」

一緒に走る男性教師とそう話しているのは、彩花の前の組で走る先輩女性教師の藤田敦子だった。藤田の言うように女医のコスチュームだと白衣を着て聴診器を首にぶら下げれば

済むので、見栄えも良く、半日過ごすにも確かに楽に違いなかった。

お願い、どうか良いコスチュームが残っていますように・・・。彩花は祈るような思いでレースの順番が回ってくるのを待った。

競技開始のピストルが打ち鳴らされ、第一組の一年生の担任をしている四人の教師達が一斉に走り出すと、応援席に座るそれぞれのクラスの生徒達から大きな声援がグラウンドに向かって響いた。

一年生の担任は五十代と二十代の男性教師四十代と三十代の女性教師の四人で、彼らは段ボール箱の中を一通り漁ると、それぞれ四つの簡易式の試着室に分かれて着替えた。試着室は、直径八十センチほどの円形のレールに薄いカーテンが取り付けられており、それで周りを覆うだけの極めて簡易的なもので、着替える教師達の肩から上の部分と足元三十センチ程が見えていた。

そして、暫くすると四人ほぼ同時に試着室から出てきて、五十代の男性教師はお殿様、四十代の女性教師はＣＡ、三十代の女性教師はナース、そして二十代の男性教師はウケを狙ったのかチャイナドレスに着替えていたのだった。グラウンドを取り囲む大勢のギャラリーが爆笑する中、コスプレ姿の教師達はゴールへ向けて懸命に走った。皆、元々着ている体操着やジャージの上からコスチュームを羽織っていたので、チャイナドレスを着た二十代の男性教師が一番走りにくかったのか、ビリでゴールしたのだった。

続いて、二年生の担任教師達四人がスタートの合図と共に走り出した。彼らもまた段ボールの中を一通り物色すると、それぞれ気に入ったコスチュームを取り試着室に駆け込んだ。今度はどんなコスプレ姿で現れるのか、生徒も保護者も皆、試着室で着替える教師達に注目していた。すると、一番最初に出てきたのは五十代の女性教師の藤田で、彼女は狙

い通り白衣を羽織った女医の恰好で現れたのだった。それは特に面白味もなく、一部の生徒達の間からブーイングが起こる中、藤田は見事一着でゴールを果たした。それからゾンビの恰好で現れた三十代の男性教師、婦人警官の恰好で現れた三十代の女性教師、最後にスパイダーマンの恰好で現れた四十代の男性教師の順番でゴールを果たしたのだった。

グラウンドに生徒や保護者の笑い声が響き渡る中、ついに最後の組の三年生の担任教師達四人の出番になり、彩花がスタートラインに立つと、彩花のクラスの生徒達だけでなく、彩花ファンの生徒達から大きな声援が飛んだ。

「木元先生、頑張って！」

「彩花ちゃん、セクシーなコスプレ頼むよー」

大勢の生徒達の期待を一身に背負い、彩花は緊張した面持ちで構えていると、ついにスタートを告げるピストルが撃ち鳴らされ、彩花は他の教師達と共に走りだした。コース上に置かれた段ボールに先に辿り着いた男性教師

二人は、それぞれスーパーマンと囚人服のコスチュームを持って急いで試着室に入っていった。男性教師達から少し遅れて彩花と四十代の女性教師が段ボールに辿り着くと、箱の中身を見た二人は驚きの表情を浮かべた。なんと、段ボールの中にはちょうど二人分のコスチュームしか残っておらず、その一つはピエロの衣装で、もう一つはあろうことか豹柄のビキニだったのだ。

ウソでしょ・・・。二人の女性教師は心の中できっと同じ事を思ったに違いなかった。そして先にピエロのコスチュームに手を伸ばし掴んだのは彩花の方だった。こんな厭らしい豹柄のビキニなんか着て、全校生徒や保護者の前を走れるわけないわ、その強い思いが四十代の女性教師よりも先にピエロの衣装を掴ませ、彩花はすぐに試着室に向かおうとした。

すると、ピエロの衣装を取り損ねた四十代の女性教師が彩花を呼び止めた。

「木元先生、ちょっと待ちなさい！」

その強い口調に彩花は思わず立ち止まり先輩女性教師の方を振り返った。

「あなた、教師として先輩の私に皆の前で恥を掻かせるつもり？」

「えっ・・・」

「あなた、そんな態度でこれからこの学校で教師としてやっていけると思っているの？」

「でも、これは運動会のただのレースじゃないですか・・・」

彩花は、先輩女性教師の恫喝に思わずたじろいだ。

「こないだの身体測定で、あなたが大勢の女子生徒達の前で素っ裸になった時、私、スマホで動画撮影していたの。私の言う事聞かなかったら、それを他の男の先生達に見せるわよ。勿論、学園長にもね。そしたらあなた、どうなるのかしらね」

先輩女性教師の思いがけない脅迫の言葉に、彩花は背筋が凍りつく想いがした。

まさか、身体測定の時に自分の恥ずかしい姿を動画撮影されていたなど、彩花はまったく知らなかった。もしそれが事実なら、彩花は智子達だけでなく、この先輩女性教師に対してもこれから屈しなければならなくなるのだ。

「ウソだと思うなら、別にそのコスチュームを着て先にゴールに向かって走ればいいわ。その代わり、運動会が終わったらすぐに私はあなたの動画を他の先生達に送るから、覚悟しなさい！」

先輩女性教師が強気にそう吐き捨てると、彩花はどうするべきか悩んだ。

ここで豹柄ビキニを着てグラウンドを走り、運動会が終わるまでその恰好でいることは、あまりに恥ずかしかった。しかし、こないだの身体測定の時に素っ裸になった様子を捉えていた動画が本当に存在し、それを他の男性教師達や学園長にまで見られてしまえば、も

うこの先この中学校で教師を続ける事すら難しいように思われた。

「さあ、どうするの？早く決めなさい」

すでに一緒の組でスタートした男性教師二人はコスプレ姿でゴールし、ギャラリーは皆、不思議そうな顔で、グラウンド上で何やら話し合う二人の女性教師の姿に注目していた。

「分かりました。それではこれは先生が着てください」

悩み抜いた彩花は、手に持っていたピエロの衣装を先輩女性教師に手渡すと、段ボールに残った最後の一つである豹柄のビキニを手に取り、試着室の中へ入ったのだった。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■そのほかＳＮＳ

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

https://www.pixiv.net/users/70200870

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈２５歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885